起ち上る農村[[1]](#footnote-1)

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　香山光郎

（上）

　平は木枯らしの走をはせるさで、水槽にはがく張つて居りました。毎日毎風また風、すつかりいやになつてしまひましたが、今日はしかくなりました。翹の黄色がからめられます。

西やににばれて行つたら、お米の御をいたゞき、ほんものゝ蕎麦もありました。鶏とも御になりました。西といふのは、平から八ばかり西の方にれた小さな町で、郡の所在地です。私が行つた時は、郡の報國大會の第二日目でしたが、郡内十四ケ面の面長、在所のそのの指者の人たちださうで、いづれもはきはきした人たちでした。も同様でしたが、地方の文の上したのにはきました。私は京城にばかり引込んでゐて、村の事に暗いのですが、今度西、の一で大發されたです。

國が相當及されて居て、では四百名ののうち國をせぬものは手を上げなさいといつたら、二十數名が手を上げましたし、國をする者は手を上げなさいといつたら、九以上手を上げました。

　それから出、給、増などについて、各面から一人づつ區長が意見をべたさうですが、いづれも流暢な國で、すべき意見を々と主張したさうです。私のの時ののも立なもので、されてゐました。たまに人も居ましたが、ど大正生まれでした。

　私は地方の人たちとして、二つのを強調しなければならないことに気づきました。ち素直に當の指に信し服從すること、は今後々國家において重んぜられ、從つての祉はされ増さるゝやう國が動くといふことです。それで私は西でもでも、わが國の神にして、わが政治の道なるを説き『素直に從へ』とめました。それから從來のの得といふ米人主は二度と日本にはつて來ない、一となつて、奉によつて樂しき道を實して、八紘一爲のをしまつるのを人生の目とする世が來るんだと話しました。（1943年4月17日『京城日報』）

（下）

　郡たちも大變熱心でした。私が會つたのは高山西郡、大平龍岡郡の二人だけでいたが、いづれも張り切つてゐて、まるでがけの人たちのやうでした。何しろ出だけでも大變なのに、それに給のことがあるでせう。郡さん[、]脚絆で、郡會のトラツクで月の半分は駈け廻つてゐるさうです。の員も同様に忙しいでせうが、郡がこんなにしい責の重いポストだとは、私は今まで知りませんでした。

　私は郡が告をべるのをしましたが、小のお氣持が、くとも郡までには徹してゐるやうでした。面員や地方の主なる人々にまで郡ほどのと氣魄が行きわたつたら、朝は確かに面目を一新するとじました。

　もっとも日向あれば陰ありで、いゝことばかりではありませぬ。間にはまだ取りかねばならないものもあれば、もつと知らせ、もつと練らせなければならないこともありました。聖の目や、必の信や、出給のや、の前のや、半人に對するお上の氣持や、まだ一にしてゐない向きもあるやうでした。これに對しては、手が廻らぬなどといつてゐる場合ではないのだから、當や盟における一のと力が必要だと思ひます。

しかしです。のさは、いづれは去るべきものです。必ず良き朝になることゝ信じます。（1943年4月18日『京城日報』）

1. 1943年4月17日、18日『京城日報』文化欄に掲載された。4月16日の「文化だより」には「香山光郎氏(作家)平壌府水玉町東陽旅館に滞在中」の記事、翌17日には「朝鮮文人報國會の結成」の記事が載っている。 [↑](#footnote-ref-1)